加藤多一と北の文学

札幌学院大学教授
渡辺　知樹

『五月になれば』のふるさと

加藤多一さんと二度ほどお会いしたことがある。柔和な表情の奥に、もの書きとしての芯の強さを感じる。日々の暮らしの話はおもしろく、ことのほか釣りの話には熱がこもる。生まれ故郷の川では、ニジマス、ヤマメ、アメマス、オショロコマなどが泳ぐと話してくれた。

旭川から車で約二時間。オホーツク海の港町紋別の手前に滝上町がある。この町中を流れる清流がサクルー川である。教科書五年生上巻『五月になれば』の舞台だ。加藤さんは一九三四年、この町の農家に生まれた。

加藤多一と剣淵町「絵本の館」

旭川の北、剣淵町は「絵本の里」として有名である。町の中心部には訪問者の心を温かく包み込む「絵本の館」がある。私が訪れた時、全国から集まった絵本のコンテストの最中で、今年の全応募作品三一八点の展示は壮観だった。

加藤さんは北海道大学を卒業後、札幌市役所勤務を経て稚内の大学教員となる。その後、この「絵本の館」設立のリーダーと知り合ったのが縁で一九八八年に剣淵に移り住んだ。

本棚には加藤さん、手島圭三郎さん、あべ弘士さん、後藤竜二さんなど、北海道を舞台に活躍する作家をはじめ、世界各国の絵本が並び、原画も展示されている。

「絵本の館」は、絵本の原画の収集数の多さで有名だが、建物も見逃せない。建築家鈴木敏司さん設計の機能的で美しい建物だ。一度は訪れる価値がある。

塩狩峠と見本林での三浦綾子

三浦綾子は、雑貨屋を営みながら小説『氷点』を書き、作家になった。旭川を中心に、三浦綾子に関する記念館が二つある。

一つは「塩狩峠記念館」（三浦綾子旧宅）であり、もう一つは「三浦綾子記念文学館」だ。

三浦綾子の自宅は、かつて旭川市内にあった小さな雑貨店で、初期の代表作『塩狩峠』『道ありき』などが執筆された。一九九三年に取り壊しを惜しむ声が多く、旭川の隣和寒町の塩狩駅の傍に移築したのが、この「塩狩峠記念館」である。夫光世さんとの慎ましい生活の様子が手に取るようにわかる。

「三浦綾子記念文学館」は、「ひかりと愛といのち」をテーマに一九九八年に開館し、小説『氷点』の舞台となった営林署の見本林の一角にある。旭川駅から車で一〇分ほどの距離だが、静かな佇まいの中、ゆっくり足を運びながら、「人はどのように生きたらよいのか」という三浦文学に流れる根源的な問いに耳を傾けることができる。写真や原稿、年表と執筆した作品をとおして、そんな演出がなされている。

どちらかではなく、ぜひ、二つの「館」の三浦綾子に出会ってほしい。分かれて建っていても、彼女の「願い」ともいうべき一本の線で結ばれている場所なのだから。

ところで、加藤さんは、全国の小中高校生対象の三浦綾子作文賞の審査員や、文学館での講演も行っている。夫の光世さんは滝上町で幼少期を過ごしたことがあるという。二人は旧知の間柄にちがいない。

ナナカマドと井上靖

井上靖は「サンデー毎日」の懸賞小説に応募した『流転』で受賞、新聞記者を経て小説家になる。『氷壁』など、新聞小説で国民の心をつかみ、『天平の甍』『敦煌』などで国民的作家になった。

さて、旭川には「北鎮」と名のつく所が今も多々ある。「北を鎮める」意味であり、昔から師団があった。井上靖は一九〇七年、春光町の師団宿舎で生まれた。父は軍医であり、一歳で父の従軍によって旭川を離れている。

幼少期から青年期までの自伝的小説として、『しろばんば』や『あすなろ物語』を発表するが、これらの作品に流れる静かな淋しさは、父の従軍先について行くことができず両親と離れて伊豆で暮らしたことによる。

旭川開基一〇〇年で旭川を訪れた折、井上靖は、「八三年前にこの地で生まれた。多くのものは時の流れの中で変わってしまった。だが、白い雪を載せたナナカマドの実の赤さだけは今も変わらない。」と語った。両親と共に暮らした日々の思いを、ナナカマドの美しさに重ねたのだ。

井上靖の没後、生前、最も幸せな時を過ごしたこの旭川に、夫人から資料が寄贈され、「井上靖記念館」が誕生した。

「北海道立文学館」と「札幌芸術の森」

北海道の冬は零下三〇度を、真夏は三〇度を超える。一世紀も前の先人たちはどんな理由があって、この地に渡ってきたのだろうかと思うことがある。

「北海道は、人間が原型で生きることを要求される土地だ。人間がナマで自然にぶつかって生きるほかない。」と、かつて北海道立文学館で加藤さんは語った。馬についての講演ではこうも語った。「私は馬が好きだ。ながい顔もいいし、ちょっと淋しそうな目の色もいい。草原をかけぬける馬。そりをひいて雪原をとぶ馬。悲しみにたえている馬。こういう馬のいる風景のむこうから、人間の家族、馬の家族のやさしい会話が聞こえてくる。」

この馬を思う心情は、昭和六一年度版の六年生の教科書に載った吉田元の『道産子』の主題と深く重なり合っている。

加藤さんのえがく児童文学の世界では、北の大地に立ち向かいながらも、自然の仕組みを知り、人や家畜と支えあって生きなければならない人の謙虚さや優しさがある。そして人のおごりに対する怒りや淋しさが加わる。

札幌の中心部、緑豊かな中島公園の一角に「北海道立文学館」がある。北海道ゆかりの文学者の足跡を常設展示し、直筆原稿など膨大な資料も保管されている。

札幌の市街地を離れて南に行くと、市民が親しみをこめて「ゲイモリ」と呼ぶ、「札幌芸術の森」がある。広大な山麓に広がる美術館も含めた芸術文化空間である。加藤さんが市役所勤務時代に、実務責任者としてオープンさせた札幌の宝と言っていい場所である。こちらにもぜひ足を運んでほしい。